

装備のベーシック・ミニマム②

「落ちると思わないし、渡れないとも思いません。でも、万一のこともあるかも知れませんが、ロープ張ります」

岩場や雪稜などでパーティーの先頭を歩いていて、たまに、「もし……」という思いが頭をよぎったりする。そんなときには、ロープを出して固定し、メンバーにはスリング、カラビナを使って命綱をつけて通過してもらうことにしている。そういう時に限って、誰かがツルリ、とやって、ぶら下がって止まったりする。幸い、打撲くらいで済んでホッと胸をなでおろすのだけれど、この程度で済んでいるのはやはり装備とその使い方を知っていたからだと思う。ツルリとやった本人は、だいたい唇を真っ白にしながら、「大丈夫、大丈夫」などと強がっていたりするのだけれど。

今回は、不定期掲載の「装備のベーシック・ミニマム②」である。

転ばぬ先のロープとスリング



カラビナ・スリング

カラビナ、スリング。ともに山の世界では一般的に岩登りや沢登りなどの道具のひとつとして認識されている。カラビナはゲートと呼ばれる開閉部品のついた金属製の環、スリングはナイロン・ロープ、またはナイロンテープを結んだり、縫ったりして輪にしたもの。

スリングの輪の長さは、一本は腰に回して結ぶことができる長さ、もう一本は固定したロープにブルージックをかけ、腰に回したスリングとカラビナでつなぎ、手を伸ばしてブルージックの結び目を掴むことのできる長さ（ややこしくてごめん！）を基本とする。

共同装備のロープ（※）と一緒に、不安定箇所通過や岩場での登り降りなどの場合の命綱として使ったり、仲間を確保したり、ホールドの代用として使ったり、と、用途が広い。それぞれ2枚と2本を個人装備として、すぐに取り出せるようにザックの中に入れておこう。よく、ちらちらザックの外側につけているのを見かけるが、ぶつけたり引っかけたりすることを防ぐためにも使わないときはしまっておいた方がいい。

冒頭の例のように、実際に固定ロープにスリングでぶら下がって止まるような場面などはない方がいい、というよりあっては困る。むしろ、通過するときに、固定されたロープに自分の身体がスリングでつながっている、万一の場合にも大丈夫だ、という「心強さ」「安心感」をメンバーに与えることが大事なのだ。

ロープをはじめとした登攀具は傷つけないように、使うとき以外はザックに入れておきたいものだ。

渋滞のモトだ、という人がいるが、ロープの固定、それに命綱をかけて通過する、これだけの使い方なので、習熟すれば、こわくて足がすくんでいる登山者よりもよほど早く安定して通過できるようになる。

「もし……」と感じたリーダー（こ

私の登山 ワタシと登山

13

半田ファミリー山の会代表
洞井 孝雄

どんな山がやりたいんだ？

の、「もし……」と感ずることができ、リーダーの資質のひとつだと思っているのだが、迷わずロープを出す。それを見て、メンバーたちはいつでもスリングとカラビナが

セットできるようになれば以心伝心、呼吸がぴたりと合った登山ができるんじゃないかな。ただし、いつも張ってもらうのが当たり前、ということになってしまうと、おそ

らくその人は二番手は歩いても、先頭を歩くリーダーにはなっていない。どんな場合にロープを取り出し、どんな風に使つか、を自分のものとして会得していくことは大事だ。

で、このカラビナとスリング、今では当たり前のように装備のひとつに挙げられているが、40年近く前には、岩登りをやらない人には見えないようなシロモノだったはず。その頃から私の所属

する会ではコレがいつでもどこでも携行すべき個人装備のベーシック・ミニマムのひとつに入っていたことを、ちょっと自慢しておきたい。

ゴトン、と動きだした。この最初のひと揺れで、ナイフの刃がリングの皮をすべって指に……痛い思いをした。いいタイミングであった。バカだね。

※ロープ。共同装備のベーシック・ミニマムのひとつとして考えているので、細かな紹介は別項に譲りたい。前述のような安全対策をとる以外にもさまざまな使い方をすることで行動半径が広がる。

カラビナ、スリング、ロープなどは、ただ持っていればいいということではなく、結び方や使い方、その仕組みなどについて知っていること、できることが前提になる。ロープの結び方やカラビナ、スリングの使い方などの知識と技術は「無形の」ベーシック・ミニマムといえる。



ナイフ

ナイフ。昔は「切れ」る」というのはホメ言葉だった。「あの人は切れ」る」という風に使われたのだが、最近は「キレる」人がコワイ。でも、ナイフは切れないと困る。ただ、扱いには注意しよう。

昔々、ヨーロッパで岩登りをしていて、懸垂下降中に、ロープが岩に引っかけたので回収できなくなり、やむを得ず途中で登り返してナイフで切断し、回収できた短いロープをつないで降りてきたことがあった。ロープを切るのにはけっこう思い切りが要る。でも、生きて還るためにはためらわずナイフを使うことも必要なのだ、と改めて感じたものだ。

まだ山への交通手段が国鉄（JRではなく）中心だった頃、車内です

グナイフに紐をつけて首から吊るせるようにしておこう。機能がいつぱいっているものは不要だが、ドライバーがついているものは何度か使って重宝したことがある。使い道は工夫次第。切ったり、削ったり、穴をあけたりという作業は案外多いもの。護身用にも（とはいえず、街中で首から下げているわけにもいかない）。大切な装備だけれど、使い方を間違えないようにしたい。

